

「男性も早い段階からホーム選びを！」

冒頭で紹介した『松溪ふれあいの家』のように、男性にフィットするプログラムがあるかどうか、も選ぶ目安の一つ。

最近、大学と提携して、高齢者が自由にキャンパスで学ぶことができる「カレッジリンク型」というコンセプトを持つ高齢者施設が登場している。

自分でプログラムを組み立てるデイサービスを選ぶのも一案。たとえば山口県『夢のみずうみ村』では、釣り、カジノ、映画鑑賞、陶芸、木工などプログラムの種類は60以上。利用者は自分で選択し、一日のメニューを決める。「自己選択・自己決定」が基本だ。プログラムだけではない。自分が暮らしたい施設そのものを参加型で作りたいという人は、企画段

階から関わることも可能。大手商社を経てITソフト企業を経営していた山本昇さん(81)が明かす。「妻が突然倒れ、介護する立場になったことがきっかけで、老人ホームについて考え始めました。私の場合、既存の施設に入るのではなく、どんな住宅で暮らしたいかを追求した結果、設計段階から関わることにしたんです」

今、山本さんが入居する神奈川県東部の『ライフ&シニアハウス港北2』は、NPO法人福祉マンションをつくる会と高齢者住宅の企画・運営を手がける㈱生活科学運営が協力して作りあげた。いわば、

「自分たちが望む地域に、望む住まいを作る」ことを目指す運動によって、「参加型のハウス作り」を実現した事例だ。

「壁の色をどうするか、入り口では靴を脱いでスリッパに履き替えようなどなど、細かい点まで入居者自身で協議して決めていきました。まるで自分の家を作る感覚。満足しています」(山本さん)

主な介護サービスについては、別表にまとめた通りだが、まずは「自分はどうしたいのか」を具体的にイメージし、それに沿って情報を集める。時には実際に現場へ足を運んで確かめる、とい

った工夫や努力も大切になる。「女性は60歳になると、友達と誘い合っているような老人ホームに足を運び、早い段階から吟味して、自分に適した暮らしを選ぶ方が多い。一方、男性は拒絶的になりがち。ぎりぎりまでねばり体が限界にまで来たら、慌てて目の前のホームへ入居する、というケースが目立ちます」(都内有料老人ホーム運営スタッフ)

人気の高いホームや公的な施設は、「数年待ちを強いられることも珍しくない」(同)のが現実だ。早めに選択ができれば、理想へと一歩近づくことになる。

「介護は100%自力ではなく」「ールの見えな(マ)ン」

核家族化、少子化、妻の変心……「男も介護する時代」への心の準備

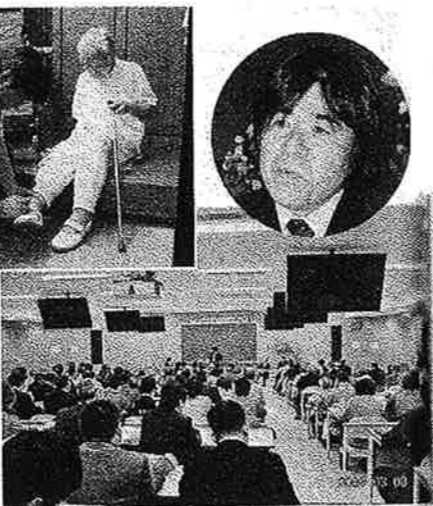
懸念すべきは自身の行く末だけではない。ある日突然、倒れた親や妻を、あなた自身が介護しなければならぬ日がやって来るかも知れない。

06年の調査を元に07年に出版された『男性介護者白書』(かもがわ

出版)には衝撃的な数字が並ぶ。男性介護者218名を調査したところ、「介護を理由とする退職」いわゆる介護離職が、男性介護者の20%にも達していた。介護のために、会社を辞めざるをえなくなる状況も十分にあり得ることを示

している。「男性介護者白書」の著者であり、『男性介護研究会』代表を務める津止正敏・立命館大学教授が指摘する。「30年前に約1割だった在宅介護者に占める男性の割合は、今や3

「男性介護者」と支援者の全国ネットワークの発足会(市内は津止正敏教授)



男性介護者も急増中(右写真はイメージです)

割に達しています。核家族と呼ばれた世代が高齢化し、「介護は嫁の仕事」という時代はもはや過ぎ去ったのです。配偶者間の介護でも夫が介護を担当するケースが3分の1もある。「妻の親子間の場合はもっと多くて、娘が55%、息子が45%と男女はほぼ同比率です」(同)

男性も介護する時代が、本格的に到来している。「平均寿命や出生率、結婚年齢など世の中の統計データのどこを調べてみても、『男性介護者』が増える条件であふれかえっています。社会の仕組みを変えていかなければなりません」(津止教授)

大きな問題も潜んでいる。実は「介護殺人」の4分の3が、男性によるものとされる。介護のストレスから虐待に走る男性も多い。「男性介護者の特徴は、100%が全労疾走型が多いこと。しかし、

介護の本質とは、先の見えないマラソンを、走り続けることなのです。男性は目標に向かって疾走し、達成できないとなると、突然ボキッと折れてしまう。それが虐待や殺人などの事件へつながっているのではないか」(津止教授)